

	<p data-bbox="448 277 544 304">エッセイ</p> <h1 data-bbox="603 327 1023 394">F.H さんの訃報</h1> <p data-bbox="786 439 1158 477">SCE・Net 小林浩之</p>	<p data-bbox="1203 295 1310 333">E-46</p> <p data-bbox="1203 369 1299 398">発行日</p> <p data-bbox="1203 421 1299 450">2013.4.1</p>
---	--	--

F・H さんの訃報が届いたのは昨年の暮れも迫った 12 月の下旬にかかる頃である。私が年賀状の作成に手を付ける直前であった。F・H さんのご主人からの喪中はがきには 12 月 6 日に、85 歳にて逝去とあった。瞬間、私は、自らの青春のジグソーの数片を無くしたように感じ、戦後の高度成長期の一人の戦友を失った、同時にその時代そのものも逝ってしまったという思いもした。

書かなかったが彼女の名前は、戦前生まれとは思えないくらい、素敵というにふさわしい。その思いは会って以来、いつも感じていたものである。

私はご主人には面識がない。常識的に考えると年齢は 90 歳に近いと思われる。年末の慌ただしさと年始のお屠蘇気分が気後れもして、お香典を送ったのは松が取れてからである。すぐに、ご主人からご挨拶があった。想像していたより若さを感じるしっかりした受け答えであった。

私が、当時の三菱化成に入社し、黒崎工場に配属されたのは 1966 年のことである。私は 24 歳であった。石油化学に進出するにあたって、三菱グループは三菱油化という会社を作った。しかし、間もなく、誰もが石油化学をやる時代となった。いささかわかりにくい事情にあるが、当時、三菱化成は三菱油化とは別に、石油化学に遅れて参加せざるをえなくなった。三菱油化とも競合しないという意味もあって、重要な誘導品のひとつに、高密度ポリエチレンをラインアップに加えることにした。しかし、その製造技術はもはや、誰も提供してくれず、その技術を自ら開発するというに挑戦していたのである。石油化学の本拠地は岡山県倉敷市の水島コンビナートであったが、技術開発は北九州市八幡区の黒崎工場であった。私はそのポリエチレンの第 2 世代の製造技術の開発に参加した。理由は私が修士課程でポリスチレンの懸濁重合をやったということだけだったと思う。最初は重合ベンチのほうに配属させられたのだが、すぐに、パイロットプラントのグループに配転させられた。すでに、水島では第 1 世代のプロセスでスタートしていたが、うまくは動かない。プロセスのトラブルシューティング的検討が必要になっていたのである。当時はこの程度の判断しかなかったのだが、今度は化学工学科を修了したという理由だけの移動であった。

その時が F・H さんとの初対面になる。その時は彼女の年齢を正確に知らないというより、既婚の女性ということもあって、意識もしていなかったが、今逆算してみると、40 歳の頃であり、45 年前の出会いといえる。怖いおばさんという印象に近い。

中間試験を行う開発の現場は、開発が目的であることは当然であったが、将来、現

場で担う人たちの教育の場でもあった。工場のいろいろな現場から水島ヘリーダー格での転勤含みで集まってきた人たちや、現場の運転要員として、季節工というより、試用工と表現したほうが良いが、本採用を半ば前提として試用採用された人たちの集合であった。運転要員として試用採用された人たちは、中学卒業だけが採用の条件で、転職者も含めて、主に九州の各地から集まってきた人たちであった。

今は大卒者が運転員として採用される時代である。だからと言って彼らが当時の中学卒以上に優秀であるわけではない。当時は、大卒者はいわゆる職員というエリートであり、一方、中卒者は言うところ、職工という身分ではあったが、金の卵とも言われた。そのような表現以上に、当時の中卒者は優秀であった。後に、その人たちは、安全活動や改善運動や小集団活動などのリーダーになって、現場を引っ張ることになった。ただ、大学卒業者も例外ではなかったが、特にその人たちの採用にあたっては、戦後の労務問題のほとぼりの冷めない時期でもあったから、家庭環境や、宗教や今なら差別と言われる行為が、採用の場で常識のように行われた時代であった。そんなこともあって、良すぎると疑われたから、すべての意味で中庸を求められた時代でもあった。現実、優秀すぎると本採用にはいたらなかった。また、中学卒という条件があったので、高校に行ったことを隠していると、職場で優秀であっても、それだけで不採用となった時代でもある。それでも優秀な素材には事欠かなかった。

私たち新入社員大卒には、試用採用者の教育係をつとめさせられた。国語や算数や理科を教える係で、本採用試験の受験教育である。私は、ここで、たとえ初等でも基礎教育が重要なことを知ることとなり、基礎を学ぶということはその後の私の座右の銘に近くなった。

私が苦勞するまでもなく、この人たちの多くは、これらを鮮やかに習得し、無事採用となった。採用されなかったのは、前述したような事情もちであった。F君という特に優秀で、性格もよく同僚にも好かれた男がいた。彼は、採用されなかった。理由は高校中退と言うのを隠したということであった。しばらくは、その後交流も続いた。彼は別の会社で採用され、営業マンとして活躍をしていたことが記憶にある。その後こちらにも転勤して音信は不通となったが、今でも、不採用となったことへの憤りも含めて、彼のことは思い出す。

臨時編成部隊の居室であるプレハブの夏は暑かった。当時、エアコンなどは、たとえ真っ当な職場でも高根の花である。トタン屋根には葦のすだれを張り、水を流した。室内は大型の扇風機が回っていた。そのなかで、F・Hさんは凜とした存在であった。男ばかりの半端の社会人の多くいる職場で、当時は給茶器もない、他に二人、今でいう派遣の年増の叔母さんがいた。彼女たちが40名を超える男たちの面倒を見ていたのである。若い女性の事務員ではできない仕事でもあった。にわか集められた臨時編成の部隊であった上、教育は何も机上だけでもないし、勉強だけでもなく、生活指導さえ必要な未成年の人たちの面倒を見ることが要求されたからである。だから、当時

の私の上司である課長も、年齢が上である彼女には一目も二目も置いていた。

ただ、2年後にはこの2期の開発は、成功せず、解散することになり、水島で3期の技術開発をやることになる。若い人は水島に移動し、現場リーダーの予定であった人は、黒崎の元の現場に戻って、残ることになった。

そのようなことで、F・Hさんとは2年のお付き合いということになる。しかしながら、彼女との間にいささかも、浮いた思い出は記憶にない。その後3期の技術開発が成功した後、黒崎でお世話になったみんなで、水島にお呼びしたことがある。それは、いわば、先生をお招きしての同窓会という趣であったと記憶している。

彼女は課長秘書という立場でもあったが、もともと書道に通じていた。OHPやビデオプロジェクターのない時代で、ガリ版刷りの複写機しかない時代である。職場でプレゼンテーションに使用される資料は模造紙に墨で書かれたそれであったし、職場に張られる注意書きも彼女のそれであった記憶がある。ずっと、45年間、賀詞の交換は続いた。端正な毛筆の賀詞をいただいたが、まさに、王羲之を模したような男文字であった。

日本が、オリンピックを開催し、万国博覧会を開催する中で、高度成長を続けたが、その中に、彼女のように、寿退社が常識の社会にあって、請われて、働き続けた女性もいた。経済的な事情で、上級学校に行くこと断念し、若い時から必死に働いた人たちがいた。結婚や出産、育児が理屈でなく人情の時代である。大勢の仲間がいた。給食も食べられず、時には学校にも行けず、頑張った時代である。国や社会が個人の事情を一つ一つ気にすることのない時代でもあった。自然に競争も生まれる。しかしともにも、戦った競争の時代である。高度成長は彼らを豊かにし、競争の無用さをつくりだしたという言い方はある。しかし、逆に、そんな彼らや、彼女たちがいたからこそ高度成長が達成できたとも言える。誤った社会主義、真顔で教職者が労働者と言ってはばからず、世の中をリードした人もいて、いささかの厳しさも競争もなくした時代にF・Hさんのように若い男性を咎め、時には叱りつけることができる女性がいたのである。

岡山県倉敷市水島に転勤した若者たちは、見事に企業や社会の期待に応えた。その人たちは、会社の階級が日常生活の場に残る社宅住まいを嫌ったに違いない。多くは当時始まったばかりの持家制度を利用して倉敷に家を構えた。時間は経って、その教え子たちも社会から、退く年齢になってしまった。或るものは倉敷人となり、或るものは九州の故郷に戻った。そして、その人たちが力を注いだ製造プラントは、役を終えたものも多いが、技術や経済の変遷を経て事業として、残っている。

今年、5月にその人たちが中心になって、倉敷で高密度ポリエチレン45年の同窓会を開く。私にも参加の案内が来たが、全く、ついていない、無念としか、言いようがないが、甥の結婚式と重なってしまった。万感の思いを込めた志を送りたいのだが、思案しても、ものでは気持ちを代えがたいという思いに悩んでいる。

最初に私の青春のジグソーの数片を失った気がすると書いた。いささかも、浮ついた感情を彼女におぼえたことはないが、私の若い人生の中のどこかに、彼女との付き合いが、

F・Hさんの訃報

掛け替えのない、深い痕跡を残していたということであろう。

あらためてご冥福を祈る。

2013年3月31日記